

サーカスがつむぐ小さな日常

- 医療と居住を結ぶ生活基盤の再編 -

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MARCH 2014
VOL. 140



日常の中にあるエントランスゲート



モビリティがやってくる



子供たちが興味を引かれ、近づいていくと



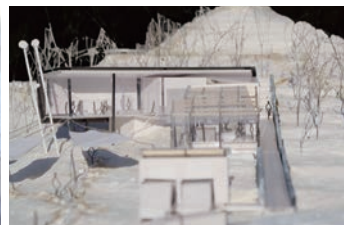
おじいちゃんたちが体調について話をしている



団地内にある箱根山の山道にはテントがかけられ



山道の麓からモビリティが発着する



モビリティの横を抜けると山頂はの道があり、



山の頂上から団地を見渡す



今度はモビリティが幼稚園施設にやってくる



モビリティによって空間が広がる



道を散歩するおばあさんが近づいていくと



健康相談会等が開かれ多世帯の交流が生まれる

図 1. つむがれる風景

第10回団地再生卒業設計賞で、厳選なる審査の結果、審査委員長を務めていた内田祥哉氏（工学院大学特任教授、東京大学名誉教授）から内田賞を受賞した早稲田大学の卒業設計の作品である。

卒業設計は一般には1人で行うものだが、早稲田大学は違う形態をとっている。異なる研究室の3名がグループを組み、メンバー3名の内、必ず1名は意匠系以外の研究室から選出することが必須となっている。このため、1人の考えだけでなく、意匠・歴史・環境といった様々な視点からひとつの作品を作り上げることができる。

この作品「サーカスがつむぐ小さな日常」は、医療と居住を結ぶ生活基盤の再編提案である。

これは、都心の老朽化・高齢化する都営団地に対し、最小限の操作を行うことによって、これからの時代に対応した生活基盤をつくる計画である。提案するものは、予防医療を展開する「サーカス」である。サーカスとは「モビリティによる移動・道具的展開・娯楽性」を持つ建築形態のことであると位置付ける。このサーカスの仕組みが団地の暮らしを豊かにし、同時に団地の周辺環境の生活基盤も支え、まちを支える機能の一部となる。

1. 問題提起

将来の超高齢化社会を見た時、医療の問題は深刻であると考えた。図2を見ると、人口は減り、高齢化は今始まったばかりということがわかる。ネットなどの通信技術の発達や段差などの身体障害、老老介護・在宅介護のような医療・介護の限界、コミュニティの消失による孤独死などの問題もある。このような医療の問題は高齢者の身体能力の低下に対する物理的なサービスの提供と、若者や子どもといった別の世代がシステムの一因となるよう、彼らの生活の基盤にもなるような提案にしま

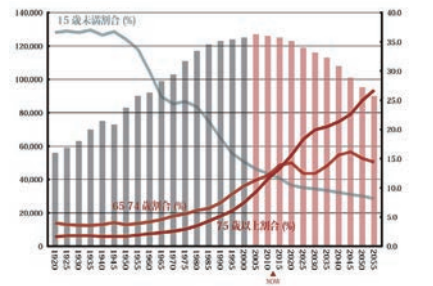


図2. 将来人口の予想と年齢別の人口割合
ければならないと感じた。そこで、超高齢化社会の新しいインフラを提案することとした。

2. 医療システムの解体と提案

集約された病院と個人は一対一でしかつながりを持たない(図3)。この間に補完する機能と装置を挿入する。地域に小さな医療の拠点を設け、そこから既存でドックとなる可能性を持つ建築に仮想的に小さな医療を展開する。地域拠点とドックはモビリティで移動する。このシステム

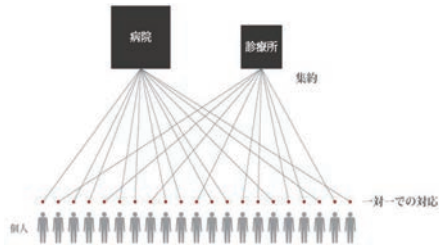


図3. 医療システムの解体

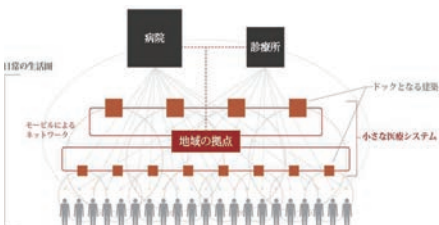


図4. 医療・生活モデルの提案

を挿入することで日常の生活圏の中に自然に医療が入り込むようにする(図4)。

小さな医療とは、病院に頼る必要のない予防医療や看護的な部分のことで、モビリティにはこの小さな医療を展開するための道具的建築が積まれている(図5)。

モビリティによる移動、複数人によって組み立てられる建築形態、娯

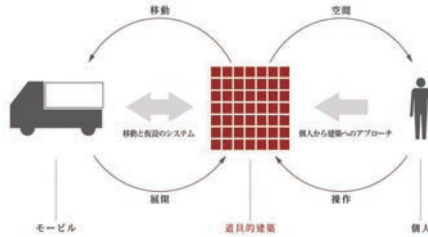


図5. 道具的要素を含む建築

楽性。この予防医療を展開するシステムを「サーカス」と呼ぶ。

3. 対象敷地

東京都の新宿区戸山公園・戸山ハイツアパート(図6)。ここは都心に埋め込まれた高齢化率約50%の超高齢化社会が展開する場所である。回遊式庭園、軍用地、宅地開発・公園計画、高層住宅と歴史を刻み、蓄積してきた。敷地内に人工的に作



図6. 新宿区戸山公園・戸山ハイツアパート

られた箱根山(築山)を小さな風景の基盤にしながら考えていくことにした。

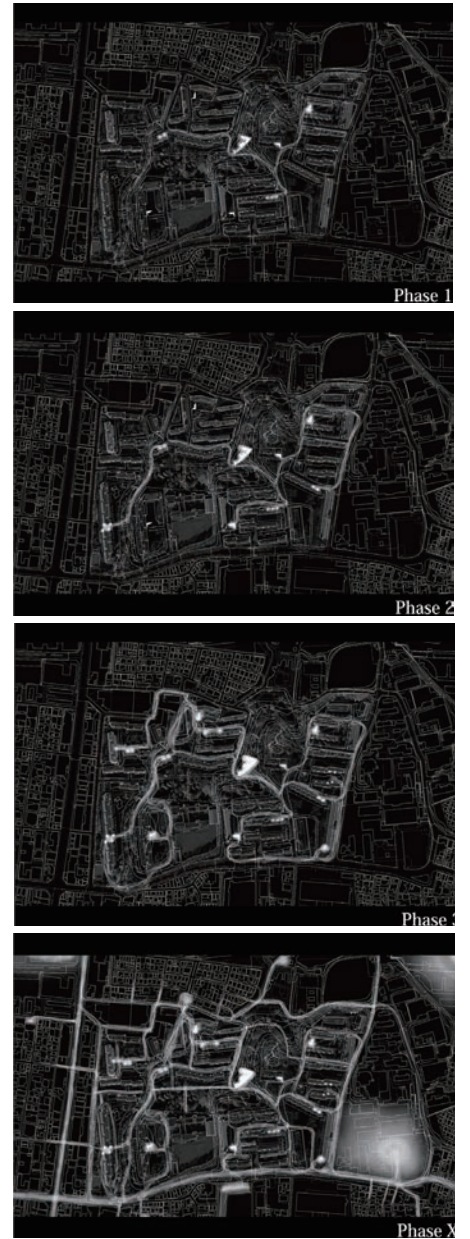


図8. 小さな医療の発展システム

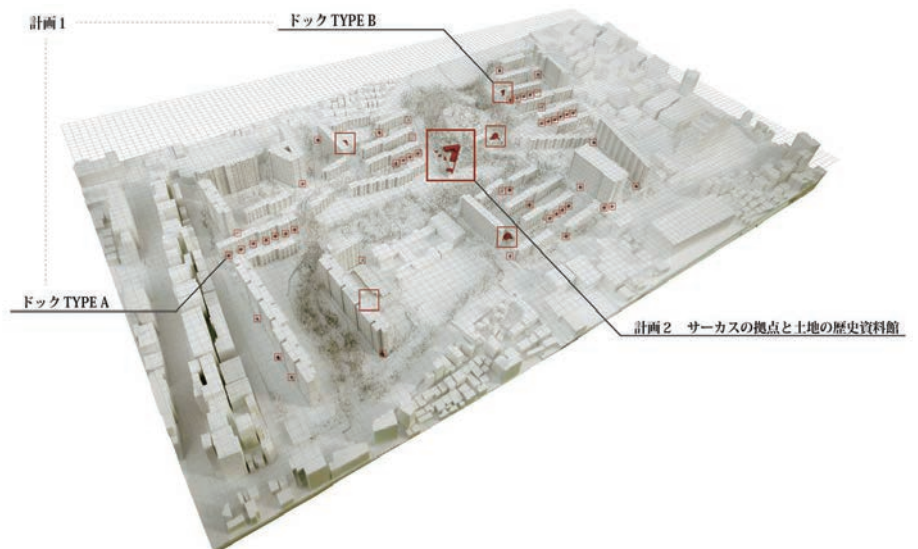


図7. 全体計画

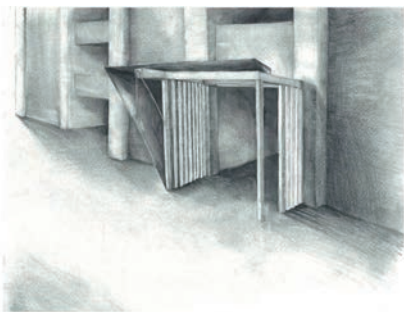
4. 全体計画

戸山ハイツアパートには 3000 戸の住民が中心を持たない敷地内に存在している。この団地内に徐々に小さな医療を展開していく（図 8）。団地内の箱根山を拠点とし、モビリティが予防医療を運ぶ巡回型システムを提案する（図 7）。モビリティが接続するためのドックを既存団地に沿って分散配置する。ドックは TYPE A の団地のエントランスゲートと、TYPE B の小さな部屋がある。

これにより、団地の医療的居住性を向上させると同時に、均質な敷地に小さな局地点を表出させる。サーカスが人々の生活に入り込むことで、団地棟内の生活が外に展開していく。



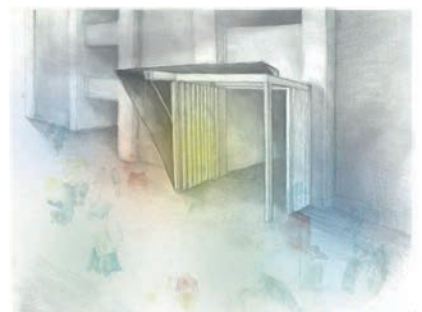
図 9. サーカスのための道具類



日常生活の中にあるゲート



サーカスが展開される風景



ゲートが色づけられていく



図 13. 日常の中のエントランスゲート



図 14. エントランスでのサーカス

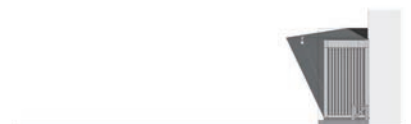


図 15. エントランス活用後



図 10. モビリティの行程表（住棟が横軸、日にちが縦軸。移動の様子を示す）

5. 提案

計画 0 小さなホスピタルサーカス

小さなサーカスのための道具群を設計した（図 9）。この、道具的建築は組み立て式の棚や床、引っ掛けテントなど複数人で協力しなければ成り立たないものが多い。住民たちが一緒になって空間をつくっていく。

また医療に大切なのは周期である（図 10）。医療には大規模なものから小規模なものまである。小規模なものは頻繁に、大規模なものは何回かに一度、ドックにサーカスを展開していく。

計画 1 ドック TYPE A

団地エントランスゲート

住戸をまとめるエントランスゲートに着目した。団地には中華料理屋や郵便局などがあり、様々な特色がある。その特色ごとで建築が組み換えられるような設計にした（図 11、12）。モバイルとエントランスゲートをテントでつなぎ、そこから空間が広がる。定期的にサーカスが開か

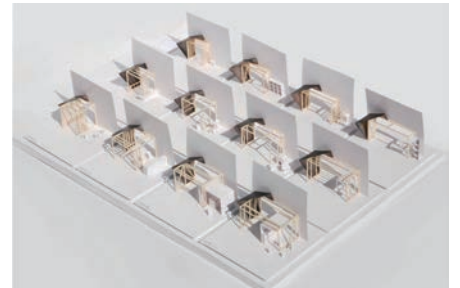


図 11. エントランスの変化

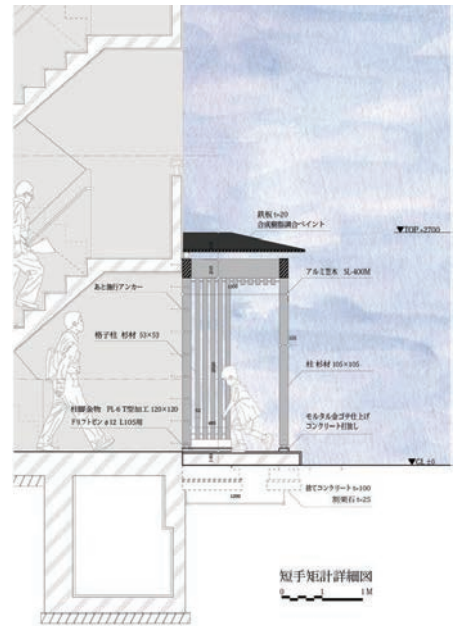


図 12. 短手矩計詳細図

れ、待ち時間におじいちゃん和孩子が触れ合ったり、中学生がこちらをみたり、小さな関係を誘発させる(図13-15)。

計画1 TYPE B

道端の小さな部屋

戸山ハイツアパートには5つの幼稚園があり、その校庭の一部に小さな部屋をつくる。ここでのポイントは道路や幼稚園などのゾーニングされてしまった公共空間を横断的に利用することで、普段はかかわりを持たない異なる人々の新しい関係性を見出すことである(図16)。建築自体も動けるものとし、小さな部屋の可動式壁を開くと公道と幼稚園がつながり、そこからサーカスが展開する(図17)。ここでは少し大きな医療が行われる。部屋の可動式壁も数人でしか動かすことができず、住民が一緒になって空間をつくる(図18、19)。ここで医療が行われたり、高齢者がお茶を飲んだりする。

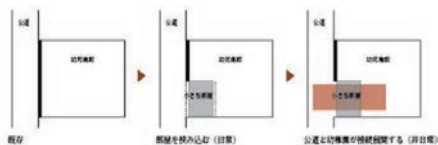


図16. 公共空間の解体

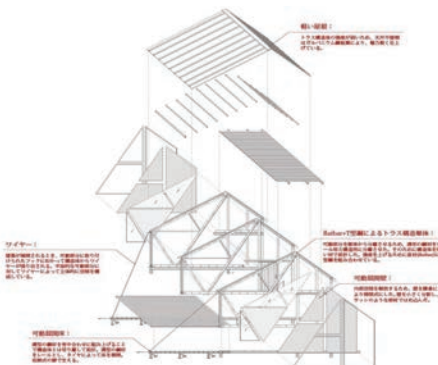


図17. 道端の小さな部屋の構造

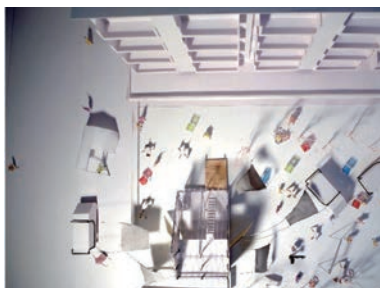
計画2 サーカスの拠点と

土地の歴史資料館

サーカスを展開するための医療設



図18. 道端の小さな部屋 サーカス前



備や管理をする場所を提案する(図20)。敷地は歴史の中心となっていた箱根山。ここは江戸時代に回遊式庭園があった場所である。後ろ側には明治時代に軍が使っていた音楽堂跡があり、大正・昭和には給水塔が建てられた。この3つの歴史軸を使って配置計画を行う(図21)。拠点施設の中心の軸は箱根山の山頂に向かっており、山に登ると一望できる。歴史資料館、医療NPOのモビリティなどが併設されている。

この施設には、滑車式手動開閉窓、ロールスクリーンなど、環境的操作が住民の手でも行えるようになっている(図22)。自分達で自主

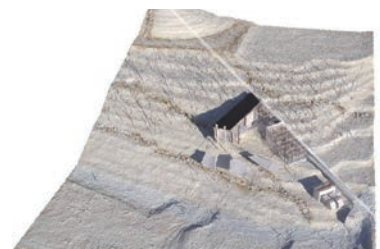


図20. サーカスの拠点と

土地の歴史資料館 模型

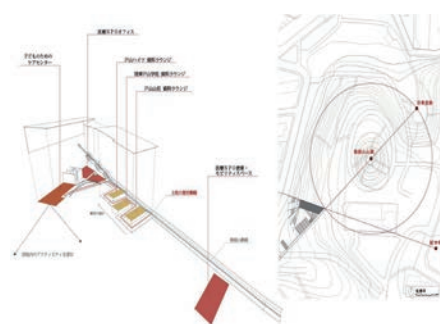


図21. 配置計画

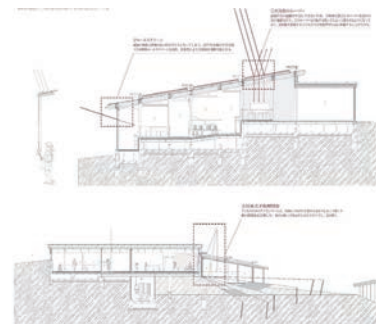


図22. サーカスの拠点と

土地の歴史資料館 断面図

的に動いていく姿勢、共有空間を管理していく意識を建築空間であらわした。

6. モビリティによる地域への展開

モビリティを活用し、対象敷地近くの都市部の病院や住宅地へサーカスが展開されていく。緊急時には団地に接している明治通りを動脈とし、団地から医療が展開されるシステムになっている。本計画は団地内だけでなく、このような団地があることで、都市全体の付加価値の向上にもなるような計画へ発展していくことを意図した(図23)。



図23. 団地から地域への展開

『サーカスがつむぐ小さな日常 - 医療と居住が結ぶ生活基盤の再編 -』

レクチャー：長谷川 俊 (早稲田大学大学院 修士課程)

森田 龍平 (横内敏人建築設計事務所)

記録・作成：松浦 知子 (関西大学大学院 博士前期課程)

倉知 徹 (関西大学先端科学技術推進機構)

(講演：2013年 9月24日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

発行：2014年3月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>